

【表紙】

【提出書類】 四半期報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の7第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成26年11月14日

【四半期会計期間】 第172期第2四半期
(自平成26年7月1日至平成26年9月30日)

【会社名】 京成電鉄株式会社

【英訳名】 Keisei Electric Railway Co.,Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 三枝紀生

【本店の所在の場所】 千葉県市川市八幡三丁目3番1号

【電話番号】 047(712)7000

【事務連絡者氏名】 取締役経理部長 小山利明

【最寄りの連絡場所】 千葉県市川市八幡三丁目3番1号

【電話番号】 047(712)7000

【事務連絡者氏名】 取締役経理部長 小山利明

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

回次		第171期 第2四半期 連結累計期間	第172期 第2四半期 連結累計期間	第171期
会計期間		自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日	自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日	自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日
営業収益	(百万円)	119,716	121,264	244,995
経常利益	(百万円)	19,837	19,162	36,980
四半期(当期)純利益	(百万円)	16,555	14,401	27,048
四半期包括利益又は包括利益	(百万円)	17,996	15,833	29,222
純資産額	(百万円)	231,575	254,755	241,480
総資産額	(百万円)	742,223	757,228	759,388
1株当たり四半期(当期) 純利益金額	(円)	48.91	42.53	79.90
潜在株式調整後1株当たり 四半期(当期)純利益金額	(円)			
自己資本比率	(%)	30.6	32.8	31.1
営業活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	21,807	18,863	46,921
投資活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	7,630	11,023	19,401
財務活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	15,714	12,180	29,300
現金及び現金同等物の 四半期末(期末)残高	(百万円)	26,926	22,344	26,683

回次		第171期 第2四半期 連結会計期間	第172期 第2四半期 連結会計期間
会計期間		自 平成25年7月1日 至 平成25年9月30日	自 平成26年7月1日 至 平成26年9月30日
1株当たり四半期純利益金額	(円)	28.53	21.97

- (注) 1 当社は四半期連結財務諸表を作成しているため、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載していません。
- 2 「第1 企業の概況」から「第4 経理の状況」まで、特に記載のない限り、消費税等抜きで記載しています。
- 3 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。

2 【事業の内容】

当第2四半期連結累計期間において、当社グループ(当社及び当社の関係会社)において営まれている事業の内容に重要な変更はない。また、主要な関係会社に異動はない。

第2 【事業の状況】

1 【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間において、当四半期報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項の発生又は前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」についての重要な変更はない。

なお、重要事象等は存在していない。

2 【経営上の重要な契約等】

当第2四半期連結会計期間において、新たに締結した経営上の重要な契約等はない。

3 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

以下の文中には将来に関する事項が含まれているが、当該事項は当四半期連結会計期間の末日現在において判断したものである。

(1) 経営成績の分析

当第2四半期連結累計期間におけるわが国経済は、消費税率引き上げ後の個人消費に足踏みが見られたものの、経済対策等を背景に企業収益や雇用情勢が改善傾向にあるなど、緩やかな回復基調で推移した。

このような状況の中で、当社グループは、全事業にわたり積極的な営業活動を展開するとともに、より一層の経費削減に取り組むなど、業績の向上に努めたほか、「BMK（ベストマナー向上）推進運動」にも引き続き取り組み、お客様サービスの向上を図った。

その結果、全事業営業収益は1,212億6千4百万円（前年同期比1.3%増）となったが、全事業営業利益は123億8千7百万円（前年同期比6.1%減）となった。経常利益は191億6千2百万円（前年同期比3.4%減）となり、四半期純利益は144億1百万円（前年同期比13.0%減）となった。

セグメント別の業績は、以下のとおりである。

(運輸業)

鉄道事業では、安全輸送確保の取り組みとして、高架橋の耐震補強工事等を実施したほか、京成本線におけるデジタルATSの設置を完了するとともに、全線設置に向けた工事を継続して行った。

大規模工事については、墨田区内における押上線連続立体化工事及び京成津田沼駅の駅舎改良工事を推進した。

営業面では、夏季繁忙期の早朝及び深夜時間帯において臨時アクセス特急を運行した。また、訪日外国人向けに「京成スカイライナー&東京サブウェイチケット」を新たに発売したほか、格安航空会社（LCC）機内における企画乗車券の販売を拡大するなど、各種営業施策を実施した。このほか、運行情報ディスプレイの設置駅を拡大し、お客様の利便性向上を図った。

バス事業では、一般乗合バス路線において、葛飾区内等で新規路線の運行を開始したほか、季節需要に対応した臨時バスの運行等を行った。高速バス路線においては、格安航空会社（LCC）利用者に対応した「東京シャトル」を増便したほか、調布駅～東京ディズニーリゾート間の運行等を開始した。また、東京駅八重洲口付近に「京成高速バスラウンジ」を開設し、お客様サービスの向上に努めた。

タクシー事業では、北総地区において共同配車センターを設置するなど、無線業務の統合を進め、利便性の向上及び配車業務の効率化を図った。

なお、消費税率引き上げに伴い、鉄道、バス及びタクシーについて、4月から新運賃での営業を開始した。

以上の結果、営業収益は676億2千5百万円（前年同期比0.4%増）となったが、営業利益は91億9千4百万円（前年同期比12.7%減）となった。

(業種別営業成績表)

業種別	当第2四半期連結累計期間 (26.4.1 ~ 26.9.30)	
	営業収益(百万円)	対前年同期増減率(%)
鉄道事業	39,107	0.6
バス事業	21,082	2.5
タクシー事業	10,869	0.1
消去	3,434	
営業収益計	67,625	0.4

提出会社の鉄道事業運輸成績表

種別	単位	当第2四半期連結累計期間 (26.4.1 ~ 26.9.30)		
			対前年同期増減率(%)	
営業日数	日	183	0.0	
営業キロ	キロ	152.3	0.0	
客車走行キロ	千キロ	48,355	0.4	
旅客人員	定期	千人	79,445	1.0
	定期外	"	54,629	0.4
	計	"	134,074	0.4
旅客運輸収入	定期	百万円	9,892	0.2
	定期外	"	18,081	0.5
	計	"	27,974	0.3
運輸雑収	"	1,677	4.1	
収入合計	"	29,651	0.5	
一日平均収入	"	162	0.5	
乗車効率	%	32.2		

(注) 乗車効率の算出方法は $\frac{\text{延人キロ}}{\text{客車走行キロ} \times \text{平均定員}}$ による。

(流通業)

百貨店業では、各種イベントを開催するなど、販売の強化に努めた。

ストア業では、既存店舗の改装工事を実施したほか、不採算店舗の閉鎖を行った。また、駅構内売店のコンビニエンスストアへの転換を推進し、収益の拡大に努めた。

しかしながら、営業収益は351億2千万円(前年同期比3.1%減)となり、営業利益は4億6千3百万円(前年同期比25.6%減)となった。

(業種別営業成績表)

業種別	当第2四半期連結累計期間 (26.4.1~26.9.30)	
	営業収益(百万円)	対前年同期増減率(%)
ストア業	18,807	3.1
百貨店業	13,063	2.8
園芸植物卸売業	1,139	7.8
ショッピングセンター業	2,326	1.5
消去	217	
営業収益計	35,120	3.1

(不動産業)

不動産販売業では、「サングランデ船橋宮本」及び「サングランデ印西牧の原ドアシティ」等の中高層住宅のほか、成田市公津の杜等の住宅用地を販売した。

不動産賃貸業では、押上本社跡地や京成バス船橋営業所跡地における商業施設の建設を推進した。また、習志野市において賃貸住宅を取得したほか、葛飾区及び成田市等において賃貸施設が稼働した。

以上の結果、営業収益は87億9千7百万円(前年同期比1.2%増)となり、営業利益は22億1千万円(前年同期比8.8%増)となった。

(業種別営業成績表)

業種別	当第2四半期連結累計期間 (26.4.1~26.9.30)	
	営業収益(百万円)	対前年同期増減率(%)
不動産販売業	2,593	7.2
不動産賃貸業	4,683	2.1
不動産管理業	1,994	12.7
消去	473	
営業収益計	8,797	1.2

(レジャー・サービス業)

ホテル業では、京成ホテルミラマーレにおいて、各種宿泊プランを企画したほか、レストランをリニューアルオープンするなど、新規顧客の獲得に努めた。

飲食業では、成田空港内のレストランをリニューアルオープンするなど、収益の拡大を図った。

しかしながら、営業収益は47億7千8百万円（前年同期比3.5%減）となり、6千5百万円の営業損失となった。

(業種別営業成績表)

業種別	当第2四半期連結累計期間 (26.4.1～26.9.30)	
	営業収益(百万円)	対前年同期増減率(%)
飲食・映画・遊技場業	1,773	5.0
ホテル業	1,271	2.9
広告代理業	1,206	0.7
旅行業	503	6.6
清掃業	23	5.0
消去		
営業収益計	4,778	3.5

(建設業)

建設業では、鉄道施設改良工事や公共施設工事等を行ったほか、新規受注先の拡大に努めた。

以上の結果、完成工事高が増加したため、営業収益は101億円（前年同期比25.5%増）となり、営業利益は前年同期と比べ改善し2億6千2百万円となった。

(その他の事業)

その他の事業の営業収益は21億5千9百万円（前年同期比41.7%増）となり、1億6千8百万円の営業利益となった。

(業種別営業成績表)

業種別	当第2四半期連結累計期間 (26.4.1～26.9.30)	
	営業収益(百万円)	対前年同期増減率(%)
鉄道車両整備業	973	32.8
自動車車体製造業	718	125.3
保険代理業	209	0.9
自動車教習所業	257	2.4
消去		
営業収益計	2,159	41.7

(2) 財政状態の分析

資産合計は、前期末比21億6千万円(0.3%)減の7,572億2千8百万円となった。これは、「現金及び預金」の減少等により流動資産が78億8千9百万円減少したことによるものである。

負債合計は、前期末比154億3千5百万円(3.0%)減の5,024億7千3百万円となった。これは、社債・借入金等が減少したことによるものである。

純資産合計は、前期末比132億7千5百万円(5.5%)増の2,547億5千5百万円となった。これは、四半期純利益144億1百万円の計上等により「利益剰余金」が119億2千7百万円増加したことによるものである。

(3) キャッシュ・フローの状況

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当第2四半期連結累計期間における営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前四半期純利益194億7千5百万円に減価償却費、持分法による投資損益等を調整した結果、188億6千3百万円の収入となり、前年同期と比べ29億4千3百万円(13.5%)の収入減となった。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当第2四半期連結累計期間における投資活動によるキャッシュ・フローは、工事負担金等受入による収入が26億8千3百万円あったものの、固定資産の取得による支出が135億5千9百万円あったことにより、110億2千3百万円の支出となった。その結果、前年同期と比べ33億9千2百万円(44.5%)の支出増となった。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当第2四半期連結累計期間における財務活動によるキャッシュ・フローは、コマーシャル・ペーパーの発行による収入が85億円あったものの、社債の償還による支出が200億円あったことにより、121億8千万円の支出となった。その結果、前年同期と比べ35億3千4百万円(22.5%)の支出減となった。

(4) 事業上及び財務上の対処すべき課題

重要な変更及び新たに生じた課題はない。

なお、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針については以下のとおりである。

(会社の支配に関する基本方針)

(1) 当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針

当社グループの基本的な事業運営の考え方

当社グループは、鉄道事業を中心とした運輸業という極めて公共性の高い社会的インフラを提供する事業を基幹(以下「コア事業」という。)としており、それに伴う社会的責任を負っている。

このような社会的責任は、当社グループの事業においては、利用者の安全と利便性を確保しつつ安定的な輸送サービスを提供することによって全うすることができる。そして、そのためには、安全対策、線路整備、施設拡充、沿線開発等において、様々な事業環境の変化を見据えた中長期的視点に立った経営を行うことが必要不可欠であると考えている。

また、当社グループの事業においては、顧客、株主、取引先、従業員にとどまらず、前記の社会的責任をもたらすものとして、地域社会との調和、環境への配慮等、事業を進めるにあたり広範囲のステークホルダーの利益に最大限配慮することも重要である。

このように、当社グループの事業は、中長期的な視点に立ち、広範囲のステークホルダーの存在に配慮した事業展開を行ってきた一つの帰結として、鉄道事業を中核としつつ、バス事業、タクシー事業を運営する運輸業や流通業、不動産業、レジャー・サービス業、建設業等幅広く事業展開しており、当社グループの企業価値は、コア事業である運輸業とこれらの関連事業との有機的な結合によって確保・向上されるべきものと考えている。

大規模買付行為への対応方針

当社は、上場会社の株主は株式の市場での自由な取引を通じて決まるものであり、株式会社の支配権の移転を伴うような株式等の大規模な買付行為であっても、これを受け容れて大規模買付行為に応じるか否かの判断は、最終的には個々の株主の判断に委ねられるべきものと考えている。

しかしながら、大規模な買付行為は、それが成就すれば、当社グループの経営に直ちに大きな影響を与えうるだけの支配権を取得するものであり、当社グループの企業価値及び株主共同の利益に重大な影響を及ぼす可能性を内包している。

にもかかわらず、実際には、大規模買付者及び大規模買付行為に関する十分な情報の提供なくしては、株主が、当該大規模買付行為により当社グループの企業価値及び株主共同の利益に及ぼす影響を適切に判断することは困難である。とりわけ、前記の当社グループの企業価値に関わる特殊事情をも考慮すると、当社は、大規模買付者をして株主の判断に必要なかつ十分な情報を提供せしめること、さらに、大規模買付者の提案する経営方針等が当社グループの企業価値に与える影響を当社取締役会が検討・評価して株主の判断の参考に供すること、場合によっては、当社取締役会が大規模買付行為又は当社グループの経営方針等に関して大規模買付者と交渉又は協議を行い、あるいは当社取締役会としての経営方針等の代替的提案を株主に提示することも、当社の取締役としての責務であると考えている。

さらに、近時の日本の資本市場と法制度の下においては、当社グループの企業価値又は株主共同の利益に対する明白な侵害をもたらすような大規模買付行為がなされる可能性も、決して否定できない状況にある。かかる状況の下においては、当社は、大規模買付者による情報提供、当社取締役会による検討・評価といったプロセスを確保するとともに、当社グループの企業価値又は株主共同の利益に対する明白な侵害を防止するため、大規模買付行為に対する対抗措置を準備しておくことも、また当社の取締役としての責務であると考えている。

(2) 基本方針の実現に資する特別な取り組み

グループ経営理念

当社グループは、前記の考え方をもとに、日々の事業活動を通じて、企業としての社会的責任を果たし、健全な事業成長を遂げることににより、社会の発展に貢献することを目指している。そのため、当社グループは、「良質な商品・サービスを、安全・快適に提供し、健全な事業成長のもと、社会の発展に貢献します。」という「グループ経営理念」を策定するとともに、この理念を実現するため、安全・接客・成長・企業倫理・環境の5項目からなる「グループ行動指針」を定め、企業価値の確保・向上に努めている。

グループ経営計画

前記のグループ経営理念のもと、グループ全体の経営の方針と目標を明確にするため、3年毎にグループ中期経営計画を作成している。この中で、グループシナジーを最大限発揮しうる体制の強化を図り、当社グループ全体の企業価値の最大化を目指すことを基本方針としている。

平成25年度から平成27年度にわたる「京成グループ中期経営計画」（以下「E2プラン」という。）においては、「成田スカイアクセスの利便性・認知度の向上による、鉄道事業の競争力・収益力の強化」、「コア事業（運輸業）を中心とした引き続き堅実な事業運営を推進することによる各事業分野での一定の事業成長の実現」、「将来に亘る安定的な事業成長の実現のため、賃貸資産の拡充及び投資案件の選別による投資規模の適正化の推進」、「減価償却費の範囲内での設備投資を原則とする、フリーキャッシュフローの確保による財務体質の強化」、「グループ全体経営を重視することによるグループシナジーの最大化並びにM&A及び事業提携を視野に入れた事業基盤の拡大」、「安全管理体制並びに異常時・災害時におけるグループリスク管理体制の強化」、「京成グループ全体のブランド価値向上による競争力の強化」の基本方針のもと、グループ全体の企業価値の最大化を追求する。

利益還元の方針

当社グループは鉄道事業を中心とする公共性の高い業種であるため、当社としては、今後の事業展開と経営基盤の強化安定に必要な内部留保資金の確保や業績等を勘案しながら、安定的かつ継続的に利益還元していくことを基本方針としている。

(3) 基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取り組み

当社は、前記の基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取り組みとして、当社グループの企業価値及び株主共同の利益の確保・向上を目的として、当社株式等の大規模買付行為に関する対応策（買収防衛策）（以下「本施策」という。）を定めている。

本施策の概要は、次のとおりである。

大規模買付ルールの設定

本施策においては、まず、大規模買付行為を行う場合に大規模買付者に従っていただくべきルール（本施策において「大規模買付ルール」という。）として、()株主及び当社取締役会による判断を可能にするため、事前に当該大規模買付者及び当該大規模買付行為に関する必要な情報を提供すること、及び()当社取締役会が当該大規模買付行為についての検討・評価を行い、大規模買付者と交渉し、株主に意見・代替の提案等を提示するため、一定期間は大規模買付行為を行わないことを、それぞれ定めている。

独立委員会の設置

本施策においては、さらに、当社が大規模買付行為に対して発動する対抗措置（本施策において「大規模買付対抗措置」という。）の発動等に関する当社取締役会の判断の客観性及び合理性を担保するため、当社の業務執行を行う経営陣から独立した者から構成される独立委員会（本施策において「独立委員会」という。）を設置することを定めている。

大規模買付対抗措置の内容・発動要件・発動手続

本施策においては、次に、大規模買付対抗措置について、()その内容として、原則として、新株予約権の無償割当てによること、()その発動の要件として、大規模買付者が大規模買付ルールを遵守しない場合又は大規模買付行為によって当社グループの企業価値若しくは株主共同の利益が著しく毀損される場合であって、当該大規模買付行為に対する対抗手段として相当性を有する場合に限って発動しうること、及び()その発動手続として、原則として、前記の独立委員会の勧告を最大限尊重しつつ、当社取締役会の決議をもって発動することを、それぞれ定めている。

当社は、平成25年5月21日開催の取締役会において本施策の具体的な内容について決定し、平成25年6月27日開催の第170期定時株主総会においてその承認を受けており、その詳細は、平成25年5月21日付で「当社株式等の大規模買付行為に関する対応策（買収防衛策）の継続のお知らせ」として公表し、インターネット上の当社ウェブサイト（<http://www.keisei.co.jp/>）に掲載している。

(4) 前記の取り組みが基本方針に沿い、当社グループの企業価値及び株主共同の利益に合致し、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではないことについて

基本方針の実現に資する特別な取り組みについて

前記(2)に記載した企業価値の向上のための取り組みは、当社グループの企業価値及び株主共同の利益を持続的に確保・向上させるための具体的方策として策定されたものである。したがって、これらの取り組みは、基本方針に沿い、当社の株主共同の利益を損なうものではなく、かつ、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではない。

基本方針に照らして不適切な者による支配を防止するための取り組みについて

前記(3)に記載した本施策は、以下のとおり、経済産業省及び法務省が平成17年5月27日に公表した「企業価値・株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針」で定める3原則（企業価値・株主共同の利益の確保・向上の原則、事前開示・株主意思の原則、及び必要性・相当性の原則）に適合している。また、本施策は、企業価値研究会が平成20年6月30日に公表した「近時の諸環境の変化を踏まえた買収防衛策の在り方」を踏まえた内容となっている。したがって、本施策は、基本方針に沿い、当社の株主共同の利益を損なうものではなく、かつ当社の会社役員の地位の維持を目的とするものでもない。

ア 企業価値・株主共同の利益の確保・向上の目的

本施策は、株主をして大規模買付行為に応じるか否かについての適切な判断を可能ならしめ、かつ当社グループの企業価値及び株主共同の利益に対する明白な侵害を防止するため、大規模買付者が従うべき大規模買付ルール、並びに当社が発動しうる大規模買付対抗措置の内容及び発動要件を予め設定するものであり、当社グループの企業価値及び株主共同の利益の確保及び向上を目的とするものである。

また、大規模買付ルールの内容並びに大規模買付対抗措置の内容及び発動要件は、当社グループの企業価値及び株主共同の利益の確保及び向上という目的に照らして合理的であり、当社グループの企業価値及び株主共同の利益の確保及び向上に資するような大規模買付行為までも不当に制限するものではないと考える。

イ 事前開示

本施策における大規模買付ルールの内容並びに大規模買付対抗措置の内容及び発動要件は、いずれも本施策に具体的かつ明確に示したところであり、株主、投資家及び大規模買付者にとって十分な予見可能性を与えるものであると考える。

ウ 株主意思の反映

本施策は、株主総会の決議によって承認されることを条件として効力を生じている。また、本施策は、本施策の有効期間中いつでも、当社株主総会の決議によっても廃止することができ、本施策の変更は、原則として、当社株主総会の決議によって承認されることをもって効力を生じる。したがって、本施策の導入、継続、廃止及び変更の是非の判断には、いずれも株主の意思が反映されるものと考ええる。

なお、当社の取締役の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の日までとなっている。したがって、大規模買付対抗措置の発動等の是非の判断にも、取締役の選任を通じて株主の意思が適切に反映されるものと考ええる。

エ 取締役会の判断の客観性・合理性の確保

本施策においては、当社の業務執行を行う経営陣から独立した者から構成される独立委員会を設置している。そして、この独立委員会は、当社取締役会に対して大規模買付対抗措置を発動することの是非を勧告するほか、当社取締役会が諮問した事項について勧告又は意見の提出を行うこととし、当社取締役会は、独立委員会の勧告及び意見を最大限尊重するものとしている。

また、本施策においては、大規模買付対抗措置の発動の要件として、客観的かつ明確な要件を定めており、発動の要件に該当するか否かの判断に当社取締役会の恣意的判断の介入する余地を可及的に排除している。

したがって、本施策においては、当社取締役会が大規模買付対抗措置の発動を決議するにあたり、その判断の客観性・合理性を担保するための十分な仕組みが確保されているものと考ええる。

オ デッドハンド型・スローハンド型の買収防衛策ではないこと

本施策は、当社株主総会の決議によって廃止することができるほか、当社株主総会で選任された取締役により構成される当社取締役会の決議によっても廃止することができ、大規模買付者が、当社株主総会で取締役を指名し、当該取締役により構成される当社取締役会の決議をもって本施策を廃止することが可能である。したがって、本施策は、いわゆるデッドハンド型の買収防衛策（取締役会を構成する取締役の過半数を交替させてもなおその発動を阻止することができない買収防衛策）ではない。

また、当社の取締役の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の日までとなっている。したがって、本施策は、いわゆるスローハンド型の買収防衛策（取締役会を構成する取締役を一度に交替させることができないため、その発動を阻止するために時間を要する買収防衛策）でもない。

(5) 研究開発活動

該当事項なし。

(6) 従業員数

当第2四半期連結累計期間において、著しい変動はない。

(7) 主要な設備

主要な設備の状況

当第2四半期連結累計期間において、主要な設備に著しい変動はない。

設備の新設、除却等の計画

前連結会計年度末に計画中であった重要な設備の新設、除却等について、重要な変更並びに設備計画の完了はない。

また、新たに確定した重要な設備の新設、除却等の計画はない。

第3 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	1,000,000,000
計	1,000,000,000

【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間 末現在発行数(株) (平成26年9月30日)	提出日現在 発行数(株) (平成26年11月14日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	344,822,371	344,822,371	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は1,000株である。
計	344,822,371	344,822,371		

(2) 【新株予約権等の状況】

該当事項なし。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項なし。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項なし。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成26年7月1日～ 平成26年9月30日		344,822		36,803		27,845

(6) 【大株主の状況】

平成26年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	23,724	6.88
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町1-5-5	13,623	3.95
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1-8-11	12,951	3.76
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内1-6-6	12,017	3.48
株式会社オリエンタルランド	千葉県浦安市舞浜1-1	11,700	3.39
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2-7-1	11,528	3.34
三井住友信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内1-4-1	5,753	1.67
ザチースマンハットンバンク エヌエイロンドンエスエルオム ニバスアカウント(常任代理人 株式会社みずほ銀行決済営業 部)	Woolgate House, Coleman Street London EC2P 2HD, England (東京都中央区月島4-16-13)	4,735	1.37
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(三井住友信託銀行退職給付信託口)	東京都中央区晴海1-8-11	4,468	1.30
京成電鉄取引先持株会	千葉県市川市八幡3-3-1	3,879	1.12
計		104,378	30.27

(注)1 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(三井住友信託銀行退職給付信託口)の持株数4,468千株(持株比率1.30%)は、三井住友信託銀行株式会社が同行に委託した退職給付信託財産であり、その議決権行使の指図権は三井住友信託銀行株式会社が留保している。

2 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ及びその共同保有者から、平成26年11月4日付で関東財務局長に提出された大量保有報告書(変更報告書)により、平成26年10月27日現在で以下の株式を所有している旨の報告を受けているが、当社として当第2四半期会計期間末における実質所有株式数の確認ができないので、上記大株主の状況には含めていない。

なお、大量保有報告書(変更報告書)の内容は以下のとおりである。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
三菱UFJ信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内1-4-5	16,879	4.89
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2-7-1	11,528	3.34
三菱UFJ投信株式会社	東京都千代田区丸の内1-4-5	4,455	1.29
三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社	東京都千代田区丸の内2-5-2	954	0.28

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成26年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 1,221,000 (相互保有株式) 普通株式 5,430,000		
完全議決権株式(その他)	普通株式 337,871,000	337,871	
単元未満株式	普通株式 300,371		1単元(1,000株)未満の株式
発行済株式総数	344,822,371		
総株主の議決権		337,871	

(注) 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が26千株含まれている。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数26個が含まれている。

【自己株式等】

平成26年9月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 京成電鉄株式会社	千葉県市川市八幡 3 - 3 - 1	1,221,000		1,221,000	0.35
(相互保有株式) 新京成電鉄株式会社	千葉県鎌ヶ谷市 くぬぎ山4 - 1 - 12	3,717,000		3,717,000	1.08
関東鉄道株式会社	茨城県土浦市真鍋 1 - 10 - 8	1,613,000		1,613,000	0.47
千葉交通株式会社	千葉県成田市花崎町 750 - 1	100,000		100,000	0.03
計		6,651,000		6,651,000	1.93

2 【役員の状況】

該当事項なし。

第4 【経理の状況】

1. 四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(平成19年内閣府令第64号)に基づいて作成している。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期連結会計期間(平成26年7月1日から平成26年9月30日まで)及び第2四半期連結累計期間(平成26年4月1日から平成26年9月30日まで)に係る四半期連結財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより四半期レビューを受けている。

1 【四半期連結財務諸表】

(1) 【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	26,904	22,622
受取手形及び売掛金	18,137	17,323
分譲土地建物	10,647	9,357
商品	2,209	2,001
仕掛品	985	2,077
原材料及び貯蔵品	1,926	2,024
繰延税金資産	1,779	1,826
その他	26,829	24,291
貸倒引当金	56	53
流動資産合計	89,361	81,471
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	260,760	259,583
機械装置及び運搬具（純額）	18,281	17,734
土地	142,639	143,393
リース資産（純額）	31,828	30,961
建設仮勘定	47,204	48,095
その他（純額）	1,886	1,808
有形固定資産合計	502,600	501,577
無形固定資産		
リース資産	1,717	1,617
その他	9,044	8,502
無形固定資産合計	10,761	10,120
投資その他の資産		
投資有価証券	138,818	146,071
長期貸付金	750	741
繰延税金資産	12,639	12,868
その他	5,220	5,162
貸倒引当金	908	906
投資その他の資産合計	156,521	163,937
固定資産合計	669,883	675,634
繰延資産	143	122
資産合計	759,388	757,228

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	18,252	12,864
短期借入金	62,158	79,574
1年内償還予定の社債	20,000	15,000
リース債務	3,475	3,431
未払法人税等	2,667	3,867
前受金	47,536	53,536
賞与引当金	2,815	2,859
役員賞与引当金	58	20
その他	35,003	35,235
流動負債合計	191,969	206,390
固定負債		
社債	55,000	40,000
長期借入金	143,740	129,951
鉄道・運輸機構長期未払金	63,577	62,223
リース債務	20,070	19,341
繰延税金負債	2,023	2,073
役員退職慰労引当金	479	432
退職給付に係る負債	30,873	32,095
その他	10,174	9,964
固定負債合計	325,939	296,082
負債合計	517,908	502,473
純資産の部		
株主資本		
資本金	36,803	36,803
資本剰余金	28,527	28,527
利益剰余金	169,745	181,673
自己株式	2,019	2,019
株主資本合計	233,057	244,985
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	3,221	3,691
退職給付に係る調整累計額	115	7
その他の包括利益累計額合計	3,105	3,698
少数株主持分	5,317	6,071
純資産合計	241,480	254,755
負債純資産合計	759,388	757,228

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

	(単位：百万円)	
	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
営業収益	119,716	121,264
営業費		
運輸業等営業費及び売上原価	89,000	91,396
販売費及び一般管理費	17,518	17,480
営業費合計	106,519	108,877
営業利益	13,197	12,387
営業外収益		
受取利息	136	91
受取配当金	136	154
持分法による投資利益	8,384	8,258
雑収入	940	847
営業外収益合計	9,597	9,352
営業外費用		
支払利息	2,677	2,276
雑支出	280	300
営業外費用合計	2,958	2,577
経常利益	19,837	19,162
特別利益		
工事負担金等受入額	337	529
受取保険金	4	502
その他	162	81
特別利益合計	503	1,114
特別損失		
固定資産除却損	334	38
固定資産圧縮損	297	662
その他	2	99
特別損失合計	635	801
税金等調整前四半期純利益	19,705	19,475
法人税、住民税及び事業税	4,361	4,151
法人税等調整額	2,059	84
法人税等合計	2,302	4,235
少数株主損益調整前四半期純利益	17,403	15,239
少数株主利益	847	837
四半期純利益	16,555	14,401

【四半期連結包括利益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
少数株主損益調整前四半期純利益	17,403	15,239
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	238	348
退職給付に係る調整額	-	79
持分法適用会社に対する持分相当額	354	166
その他の包括利益合計	593	594
四半期包括利益	17,996	15,833
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	17,146	14,994
少数株主に係る四半期包括利益	849	838

(3) 【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

	(単位：百万円)	
	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前四半期純利益	19,705	19,475
減価償却費	10,942	11,040
固定資産圧縮損	297	662
固定資産除却損	328	143
繰延資産償却額	22	20
投資有価証券評価損益(は益)	-	2
のれん償却額	196	81
退職給付引当金の増減額(は減少)	37	-
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	-	189
受取利息及び受取配当金	273	246
支払利息	2,677	2,276
固定資産売却損益(は益)	20	67
投資有価証券売却損益(は益)	48	30
持分法による投資損益(は益)	8,384	8,258
工事負担金等受入額	337	529
たな卸資産の増減額(は増加)	346	224
その他	3,030	2,316
小計	28,128	22,125
利息及び配当金の受取額	1,497	1,432
利息の支払額	2,697	2,349
法人税等の支払額	5,121	2,344
営業活動によるキャッシュ・フロー	21,807	18,863
投資活動によるキャッシュ・フロー		
固定資産の取得による支出	11,315	13,559
固定資産の売却による収入	64	71
工事負担金等受入による収入	3,251	2,683
投資有価証券の取得による支出	29	32
投資有価証券の売却による収入	111	37
その他	286	222
投資活動によるキャッシュ・フロー	7,630	11,023
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	3,273	904
長期借入れによる収入	600	10,010
長期借入金の返済による支出	8,913	7,288
コマーシャル・ペーパーの増減額(は減少)	-	8,500
社債の発行による収入	9,942	-
社債の償還による支出	10,000	20,000
鉄道・運輸機構未払金の返済による支出	1,284	1,308
リース債務の返済による支出	1,674	1,817
配当金の支払額	1,030	1,030
その他	81	149
財務活動によるキャッシュ・フロー	15,714	12,180
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	1,537	4,339
現金及び現金同等物の期首残高	28,464	26,683
現金及び現金同等物の四半期末残高	26,926	22,344

【注記事項】

(会計方針の変更等)

「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日。以下「退職給付会計基準」という。)及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日。以下「退職給付適用指針」という。)を、退職給付会計基準第35項本文及び退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めについて第1四半期連結会計期間より適用し、退職給付債務及び勤務費用の計算方法を見直し、割引率の決定方法を割引率決定の基礎となる債券の期間について従業員の平均残存勤務期間に近似した年数に基づく割引率から退職給付の支払見込期間及び支払見込期間ごとの金額を反映した単一の加重平均割引率を使用する方法へ変更した。

退職給付会計基準等の適用については、退職給付会計基準第37項に定める経過的な扱いに従って、当第2四半期連結累計期間の期首において、退職給付債務及び勤務費用の計算方法の変更に伴う影響額を利益剰余金に加減している。

この結果、当第2四半期連結累計期間の期首の退職給付に係る負債が1,534百万円増加し、利益剰余金が1,443百万円減少している。

なお、当第2四半期連結累計期間の損益に与える影響は軽微である。

(四半期連結貸借対照表関係)

固定資産の取得原価から控除した工事負担金等累計額

	前連結会計年度 (平成26年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成26年9月30日)
	128,868百万円	129,316百万円

(四半期連結損益計算書関係)

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりである。

	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)		当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
給与	2,877百万円	給与	2,907百万円
賞与引当金繰入額	692	賞与引当金繰入額	662
役員賞与引当金繰入額	22	役員賞与引当金繰入額	20
退職給付引当金繰入額	261	退職給付引当金繰入額	
退職給付費用		退職給付費用	279
役員退職慰労引当金繰入額	48	役員退職慰労引当金繰入額	47

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
現金及び預金勘定	27,147百万円	22,622百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	220	278
現金及び現金同等物	26,926	22,344

(株主資本等関係)

前第2四半期連結累計期間(自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)

1 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年6月27日 定時株主総会	普通株式	1,030百万円	3.00円	平成25年3月31日	平成25年6月28日	利益剰余金

2 基準日が当連結会計年度の開始の日から当四半期連結会計期間末までに属する配当のうち、配当の効力発生日が当四半期連結会計期間の末日後となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年10月31日 取締役会	普通株式	1,030百万円	3.00円	平成25年9月30日	平成25年12月3日	利益剰余金

当第2四半期連結累計期間(自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)

1 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成26年6月27日 定時株主総会	普通株式	1,030百万円	3.00円	平成26年3月31日	平成26年6月30日	利益剰余金

2 基準日が当連結会計年度の開始の日から当四半期連結会計期間末までに属する配当のうち、配当の効力発生日が当四半期連結会計期間の末日後となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日	配当の原資
平成26年10月31日 取締役会	普通株式	1,030百万円	3.00円	平成26年9月30日	平成26年12月2日	利益剰余金

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第2四半期連結累計期間(自 平成25年4月1日 至 平成25年9月30日)

報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント						計	調整額 (注)1	四半期 連結損益 計算書 計上額 (注)2
	運輸業	流通業	不動産業	レジャー・ サービス業	建設業	その他 の事業			
営業収益									
(1) 外部顧客に対する 営業収益	66,905	35,881	6,141	3,955	5,735	1,097	119,716		119,716
(2) セグメント間の内部 営業収益又は振替高	454	347	2,549	997	2,313	426	7,090	7,090	
計	67,360	36,228	8,691	4,953	8,048	1,523	126,806	7,090	119,716
セグメント利益 又は損失()	10,536	623	2,031	26	58	34	13,125	72	13,197

(注)1 セグメント利益又は損失の調整額は、セグメント間取引消去及びのれん償却額である。

2 セグメント利益又は損失は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っている。

当第2四半期連結累計期間(自 平成26年4月1日 至 平成26年9月30日)

報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント						計	調整額 (注)1	四半期 連結損益 計算書 計上額 (注)2
	運輸業	流通業	不動産業	レジャー・ サービス業	建設業	その他 の事業			
営業収益									
(1) 外部顧客に対する 営業収益	67,148	34,796	6,301	3,783	7,780	1,453	121,264		121,264
(2) セグメント間の内部 営業収益又は振替高	476	323	2,495	994	2,319	706	7,317	7,317	
計	67,625	35,120	8,797	4,778	10,100	2,159	128,581	7,317	121,264
セグメント利益 又は損失()	9,194	463	2,210	65	262	168	12,232	154	12,387

(注)1 セグメント利益又は損失の調整額は、セグメント間取引消去及びのれん償却額である。

2 セグメント利益又は損失は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っている。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前第2四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成26年4月1日 至平成26年9月30日)
1株当たり四半期純利益金額	48.91円	42.53円
(算定上の基礎)		
四半期純利益金額 (百万円)	16,555	14,401
普通株主に帰属しない金額 (百万円)		
普通株式に係る四半期純利益金額 (百万円)	16,555	14,401
普通株式の期中平均株式数 (千株)	338,524	338,580

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していない。

(重要な後発事象)

該当事項なし。

2 【その他】

平成26年10月31日開催の取締役会において、第172期の中間配当に関し、次のとおり決議した。

配当金の総額 1,030,803,507円

1株当たりの金額 3円00銭

支払請求権の効力発生日及び支払開始日 平成26年12月2日

(注) 平成26年9月30日の最終の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、支払いを行う。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし。

独立監査人の四半期レビュー報告書

平成26年11月6日

京成電鉄株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 平 野 満

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 高 橋 正 伸

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている京成電鉄株式会社の平成26年4月1日から平成27年3月31日までの連結会計年度の第2四半期連結会計期間(平成26年7月1日から平成26年9月30日まで)及び第2四半期連結累計期間(平成26年4月1日から平成26年9月30日まで)に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、京成電鉄株式会社及び連結子会社の平成26年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1 上記は四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは四半期レビューの対象には含まれていません。